

町史

とっておきの話

234

只見町文化財調査委員

新国 勇

町民が生んだ只見の宝「民具」④

町史編さん事業と 民具整理

只見町史編さん事業が、平成元年にスタートしました。これは町の歴史や民俗、自然について総合的な学術調査を行い、聞き取りや資料の収集、現地調査をして本にまとめようというものです。教育委員会内に町史編さん室を設け、本巻六冊、資料集五冊の計十一冊を刊行する計画です。

はじめの一冊は、町史『民俗編』を発刊することになり、民俗部会が立ち上がりました。町内を調査するうち、あちこちに民具が集められていることが話題となり、民俗調査の一環として、民具も調べてみようということになりました。そこで翌二年度から只見町民俗資料分類整理事業として予算化され、同年六月、本格的な民具整理がはじまりました。参加したのは、地元の歴史や民俗を愛好していた朝日郷土研究会と明和の民俗を語る会の方々です。代表は、朝日は横山哲夫さん、明和は目黒鶴吉さんで、どちらも当時の公民館長だったことから、公民館を巻き込んだ展開となりました。年齢は、四十歳代から最高齢九十歳まで

と幅広く、あわせて三〇人ほどが集まりました。この作業では、徹底した整理マニュアルが作られ、整理後は民具の本を発刊することを目標に掲げました。指導には、民俗編執筆者の佐々木長生福島県立博物館主任学芸員があたり、収蔵先の旧朝日公民館と旧明和中学校寄宿舎が整理場所となりました。カードやカメラなど必要なものは教育委員会がすべてそろえましたが、作業は町民自らが行います。

山のように積まれた民具は、何十年も放置されていたため、ホコリが積もり、クモの巣がはり、カメムシが入り込んでいてひどい状態でした。そのような民具のホコリを払い、ぞうきんで汚れをふき取ることから始まりました。ナベやカマ、ノコギリ、ナタといった鉄製品はサビを落としてから椿油を塗り、新聞紙で包みます。こわれていた民具は補修しました。そして、きれいになった民具から寸法を測ります。つぎに台帳用の民具カードに、通し番号を打ち、名称、寄贈者、計測値、使い方を記入します。最後に写真に撮ったあと、民具にも同じ通し番号と名称、寄贈者を記した小さなカードをつけるのです。

二か所で別々に行っていたので、「うちは一日一〇〇個整理した」「むこうでは一二〇個整理した」などと競争となり、整理は一気に進んで、現場での作業は十一月に終了しました。さらに梁取の蔵や旧入叶津分校、旧五十嵐住宅にあった民具も一緒に集めて整理を終えました。

冬に入ると、公民館に集まって民具カードに写真を貼り、裏面に民具にまつわる思い出や使い方を記入しました。これは何も知らない自分の孫子に教える気持ちで書いてもらったものです。そして、平成三年三月、四四一七点にのぼる民具の整理が完了したのです。

平成三年度からは本の出版に向けて作業が始ま

りました。本に掲載する写真は、民具整理に携わった町民が出演し、民具の使い方を再現する形で撮影が行われたのです。これは町史資料集第一集『図説会津只見の民具』として翌四年一月に刊行されました。たいへん好評で一か月ほどで売り切れ、その後二回にわたって増刷されたほどです。

この第2期にあたる民具整理では、平均年齢七十歳以上というお年寄りたちが、毎日、水もトイレもない作業場で、ススと汗まみれながら、苦勞の多い作業となりました。しかし、だれ一人文句も言わず、喜々として整理し、民具の思い出をカードに記したのです。まさに町民パワー全開で悲願だった民具の整理を完了しました。町民による民具整理のちに「只見方式」とよばれ、全国から注目されるようになりました。



▲ 民具の山を端から整理



▲ 大量の民具カードを分類